



服部君の死に思う 米国留学生への教訓

●一九七六年卒

ニノ湯とクニ

"I'm sorry, it was miscommunication. I never happen again."
無罪判決直後、弁護士を伴って報道陣のインタビューに答えた本人。さらにこれからも銃を持つかという質問に「イエス」と答えた30才位のごく普通のサラリーマンタイプに見えるまだ若い男性。事件以来、ちょうどハロウィーンの時期と重っていることもあって、数日間ニュースや新聞に取り上げられアメリカの人々の関心を集めた事件でした。私自身は有罪を期待していただけに、無罪と決まった時は本当に残念でした。「家族を守るための防衛手段だった」と主張していましたが、死人に口なしで、自分の都合に合わせて正当防衛にしてしまった様にも思われました。正当防衛ばかりが正当化されて、服部君の死の方が軽くなってしまった残念な事件でありました。

ミスコミュニケーションの争点となった、「フリーズ」と「フリーズ」、これは言葉がわからなくても、その場のムードで理解できたであろうし、家をまわがえた服部君にとっでは、それもハロウィーンのおまつりの一部と勘違いしたのかも知れません。なぜ威嚇射撃に止めておかなかったのか、もし足元だけをねらっただけだったら、軽いけがで助かったかもしれない。はっきりした危害を加えた証拠もないまま、撃つ側にとつてもいろいろ方法があったのに、その時の感情で相手を殺してしまっても正当防衛が認められたことに、私は恐怖さえ感じました。

口頭、私自身も道をまわがえれば、車を止めて人に聞くし、民家の少ない所では、知らない家に寄って「誰その家はどこですか」とたずねることもあるのです。服部君のようなケースは誰にでも起こり得ることなのです。

アメリカでは常に、「殺されたのが白人だったら、撃つたのが黒人だったら、判決はどうなつたらうか」と考えます。時は同じくして、アンカレッジでも、ひんぱんに強盗に入られて、勳忍袋の緒が切れた家具店主が、ついにガンを取り出して万引き高校生を背後から撃ってしまったという事件がありました。白人の高校生と白人の店主でしたが、店主は5年の実刑という判決でした。理由は「たとえ強盗

とはいえ、殺される権利はない」というものでした。服部君の件と比べて土地柄でこんなに考え方が違うものだろうか、かえってこの店主は人々の同情を買ったものでした。服部君の事件はルイジアナという南部の州で、今大人種差別が強い所だそうだし、アラスカは歴史が浅くよそ者ばかり集まった比較的公平に思われる所です。

服部君の死の教訓から学ぶことは、アメリカへ留学する学生たちは「もはやアメリカはキング牧師の言われたような『I have a dream』という状態ではなくなりつつある」とことをよく肝に命じて日本を離れてほしいということです。野に放された鳥のように軽く飛ばずその土地を知り、その土地に住んでいる人に頼り、教えてもらい、慎重に行動することだと思えます。

アメリカの犯罪はうなぎ登り、私の住む人口たった25万人のアンカレッジさえ、このところハンドガンで通行人を車から撃つ事件が続いたり、中学生、高校生のハンドガンによる事故死や殺人があつたと絶ちません。アラスカ州議会では、そういった場合に自己防衛ができるという理由からか、ハンドガンの登録はするけれどガンを携帯してもよいという規則が通つてしまつたばかりです。ガンコントロールは困難をきわめるばかりです。



国際ビジネスの現場 ニューヨークにて

●一九八八年卒

谷崎 修

NGU経済学部を卒業して早5年が過ぎました。今私は28才で、近畿銀行へ入行し名古屋の堀田支店で1年間出納という仕事をし、2年目から海外(営業)になって以来、今年の4月まで5000のバイクに乗って雨の日も嵐の日もお客様の家に向かって走っていました。この海外という仕事を語ると話が長くなってしまい、涙なしではいられないほど惨めで悲惨な気持ちになつてしまっています。ちょっとだけここにのせておきます。

海外という仕事は私には理不尽なことをする、またはされることのように思えます。いりもしないお金を貸したり、またほかの銀行から中途解約させて預金させたり、ノルマ

のために出来ることはなんでもするという理不尽な世に生産性をもたらさない仕事であつたという印象が、つよく気持ちの中にあります。

また、理不尽なことをされるといふ意味では上司からかくも恐ろしいノルマを言い渡され、達成するまで帰ってくるとか、「やる気がないのか」とつめられてしまい、一歩間違つるとノイローゼになり兼ねない仕事であると感じています。しかしそこには「ただし」とつきます。もし海外活動の中で、お客様に信頼され、気に入られて理不尽なお願ひも、「しかたない、あんたのためならやってみよう」と思わせることができたなら、これは海外活動を成功に近づける要因となります。

海外というのはそんな仕事です。私は4年間、それに耐えてきました。その間私の気持ちの中で思い続けた事は、なんとか英語が使える仕事をしたということでした。NGU時代に経験できた9か月間のアラスカ大学生活で覚えたいい加減な英語を忘れまいと、社会人になってからも英会話学校に通い続けていました。それでも英語のボキャブラリーは確実に失われていき、英語が使える仕事という目標もあきらめつつありました。

そこへきて、今回ニューヨーク支店勤務を命じられ、その内示をもらった時にはあまりの嬉しさに涙で酔い潰れてしまいました。

ニューヨークにきて2か月になりますがまだ余り慣れずおらず、仕事を覚えるので一生懸命です。私の今やっているのは、主計という仕事で、アシスタントマネージャーというポジションをもらっています。

アラスカとニューヨークではなにかがうかというところ、すべてが違います。アラスカの印象は、とても寒く、人の少ない、自然がいつもみじかである印象が強かったのですが、ニューヨークは人種のるつぼであり、高層ビルとビジネスマンの街であると思います。アラスカでは日本を感じさせるものがほとんど無く、たまに日本食を食べたりすると感激していましたが、ニューヨークはなんでもあり日本人もほんとにたくさんいるので日本を恋しく思うこともありません。

今の私の目標は、そんなニューヨーク生活を少しでも長くエンジョイできるように仕事を頑張ることです。

私の後輩たちに期待することは、頑張つてNGUの名を広めてほしいことです。私もまだ若いので、その役目を果たせるよう頑張りたいと思っています。